

二つの時間意識 ～カイロスとクロノス～

岩 村 太 郎

I はじめに

もしそれについて尋ねられないのであるならば知っているが、きちんと尋ねられるとまったく答えられないものが時間である。古代ローマ末期の神学者アウグスティヌスが考えたと同じように、時間の哲学とはまさに人類にとっての永遠の課題であろう。ざっと見渡してもアリストテレス、アウグスティヌス、カント、シェリング、キルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ベルクソン、フッサール、そしてパウル・ティリッヒ。彼らは皆、それぞれ神学と哲学の立場に立ちながら独自の時間論を展開していった思想家たちである。またいわゆるニュートンに代表されるような近代物理学という力学的世界観とはまったく発想の違う、哲学的時間論すなわち時間意識を根源から問うという仕方での問い、時間の意味への問いを主題化した思想家が以上挙げた人々であろう。

本稿では後半部分で十九世紀から二十世紀にかけて多くの著作を残し、現代神学を代表する神学者の一人であるパウル・ティリッヒを取り上げ、その独特の歴史哲学の中でカイロスとクロノスという二つの時間を意味する言葉が、どのように使われているかを考察してみたい。そして時間意識の違いそのものが、実は歴史意識の違いにまで発展することを検証したい。

II 時間の基底構造

先ほども述べたとおり、問われない限りその存在自体にさえ気づかずにす

むのが時間意識ではないだろうか。しかしふと立ち止まって深く考えるならば、時間とはある時は流れ去り、ある時は止まっている。ある時は早く流れ、ある時はゆっくりと流れる。直線のようにまっすぐに進んでいる時と、円を描くように円環的あるいは螺旋状に少しずつ前進していることもある。あるいは自分の意志に関係なく向こう側から一方的に向かって来る時と、自ら進んで行かなければこちらへ到達してこないだろうと感じられることもある。連続した時間と非連続な時間、非連続あるいは不連続な時間とは、時間があるところで切断されていることをはっきりと認識させられてしまうこと、欠落した時間の存在に気づくこと、これらの感覚は時間を哲学する上では非常に大切なものである。

アウグスティヌスは一切の時間の原因を神に求めた結果、時間に関する哲学的問いを一気に解決したと考えた。カントは時間を内的直観の表象とし、経験から得られるものではない人間のもつ認識のア・プリオリな基本条件であるとしたものの、物自体は不可知であるとした。キルケゴールは時間の中でも瞬間に着目した最初の哲学者であり、この瞬間という時間意識こそ、後述するティリッヒに強い影響を与えた概念である。ニーチェは世界の出来事は円環運動をしながら永遠に繰り返すという、古代ギリシアの自然哲学にあった思想を近代において復活させた。ハイデガーは『存在と時間』において人間存在と時間との意味を問い続け、世界内存在である投げ出された存在としての現存在の意味を再び問うのである。ベルクソンは空間化的時間に対して純粹持続としての時間論を展開し、固定化されることのない創造的進化をより根源的なものとみなす結論を得ている。フッサールは内的時間意識の現象学として、デカルト哲学を超える試みを繰り返した。ティリッヒは後期シェリングとキルケゴールの実存思想に決定的に影響されながら、存在論と時間論を極めて精巧に組み合わせたといえる。

以上概観したとおり、これらの哲学者たちはデカルトとニュートン以来の近代物理学的時間論とは質的に違う時間論を展開しており、またアインシュタインの打ちたてた相対性理論など知る由もなく、まったく別の観点から思考を試みていた。あくまでも彼らに共通する時間とは、対意識としての時間

である。自己意識から離れた客観的時間については、その存在を否定するものではないにせよ、少なくとも関心の対象からは外れていたと言ってよいであろう。時間と空間の存在は厳密な意味で必ずしも客観的に自明なものではなく、むしろ肝要なことは時間空間を意識との関係でとらえることだったのである。皮肉な見方をすれば、デカルトの自然哲学は引き継がず、デカルトの意識哲学をかなりの度合いで引き継いだとも言えるのである。時間の基底構造は自然科学的に分析されているのではなく、意識哲学的にとらえられていることをここで確認しておきたい。さらにこの意識哲学はやがて宗教的神認識の意識へと転換していくこともあった、これはティリッヒの場合など明らかな事実であった。

III クロノスという時間

ギリシア語においてどちらも時間を意味する言葉であるカイロス (*καιρός*) とクロノス (*χρόνος*) の区別はあまりにも重要である。ここではクロノスの意味をまず考えてみたい。ギリシア神話中でのクロノスはもともとは河の神であったようであるが、農耕神のクロノス (*κρόνος*) と発音が似ているためこの二つは混同された。例えば芸術家たちはクロノスを強い老人とし、長く白いひげを持ち頭ははげ、左手に杖、右手に鎌を持たせている。利き腕である右手に鎌を持っていることがここでは特に重要である、すなわち時の流れは全てを滅ぼし消し去るので、クロノスはその右手の鎌で全てを刈り取ってしまうとイメージされていた。ここに哲学的神のイメージと農耕神との混同が見られる。しかし由来の異なる別々の神が、しばしば区別されず使われそのまま定着してしまうということは決して珍しいことではなかったようである。ともかくクロノスは、一般的には流れ去る時間、流れ消える時間として定着していた。

神話時代が終わり自然哲学の時代に入り、そしてギリシア哲学が本格的に開花してからもクロノスという時間は哲学の主要な問題となっていった。「永遠性の模像」(プラトン『ティマイオス』37d)、「前後関係における運動の数」(アリストテレス『自然学』219b)、「偶発性の偶発性」(エピクロ

ス断片294：Usener), 「運動の間隔」(ストア派)などとクロノスは定義されていた⁽¹⁾。クロノスが以上のように専ら時間の量的意味に限定されて用いられてきたことから、元来は基準や節度という事物的意味ももっていたカイロスとの差別化、区別化が決定的となっていたのである。つまりクロノスは物理的時間であり量的に計測可能な時間、カイロスは意味時間であり感じる時間となっていた。時間の意味に関する、うまい住み分けがここに始まった。言語をカテゴリー化して考える近現代の思考の枠組みからは、ある意味では大変に区別しやすく分かりやすいこととなっていたのである。カイロスとクロノスの意味の区別とは、ギリシア哲学者たちが後世に残した偉大な遺産の一つであると考えられる。やがてクロノスは近代物理学の主要なテーマとなったが、相対性理論の出現により大きく転換を迫られる。一方のカイロスは、ユダヤ・キリスト教における救済史と密接に結びつき、その後キルケゴールに始まる実存思想と深く関わって哲学的に発展していった。

人間を襲う数々の不幸の究極の原因は、時間の流れの不可逆性にある。現在を基準に考えて、過去が過ぎ去ったもの、未来がこれから来るものと断定する限り、時間の流れは過去から現在未来への一方通行となる。またこの時間の流れは直線運動であり、始めから終わりへの方向性をもった等速度運動となろう。この直線史観こそ、その根がヘブライズムにあることは疑いようもない。天地創造から終末へ向かっての一方的な直線運動がヘブライズムの時間意識である。時間を直線で見ると、過去とはもう人間の力ではどうしようもない転覆されようのない厳粛な事実と化し、もはや人間の記憶の中にしかその場をもてなくなる。過去の持つそのはかない一回性と再現不能性、逆行不能性ゆえにそれを覆すべく神々への期待と信仰が要請された、とも考えられようか。あるいはまた時間のもつその一期一会性のゆえに、今現在を真剣に生きることを考えたのであろうか。カントが神の存在を理論理性によって証明することを諦め、今を生きるために道徳的に要請したことと似ている点もあろう。クロノスは初めから人間によって、直線志向であることが必然的に求められていたのかもしれない。

さらに視点を変えると、われわれは過去は過ぎ去ったのであるからわれわ

れの後ろにあり、未来はまだ来ていないので眼の前に広がっているもの、という漠然としたイメージがありはしないだろうか。あるアフリカの部族においては、時間が長い過去と現在という二つにのみ分けられ、その結果未来という観念が存在しないことがある。またある別のアフリカの部族においては、過去は自分がかつて見てきたものであるから自分の眼前に横たわって見えているが、仮に未来があるにせよ未来はまだ見ていないので自分の頭の後ろにあると考えているそうである⁽²⁾。これらは例外的見方ではない、時間の流れを同じ直線として見ながらも、過去・現在・未来に対する発想とイメージがまったく異質なのである。一口に直線史観と言っても、その意味内容がこれほどまで相違していることは極めて興味深い事実である。

一方に流れ行くクロノスという時間、取り返しのできない時間、直線運動をする時間、再体験することのできない時間、記憶の中にしかない時間、哲学的にはその意味と目的が分からないままともかく進んでゆく時間、無機物的に機械的にじわじわと進んでくる時間、これらがクロノスのもつ著しい特徴である。右手に鎌をもち、全てを刈り取るというイメージもなかなかの説得力をもっているようで、改めて古代ギリシアの芸術家たちのもっていた想像力に感心せざるを得ない。

ニュートン力学を人間理性が獲得した絶対の真理であると信じて疑わなかったカントにとっても、空間は外的直観の表象、時間は内的直観の表象であった。しかもこれら二つの根本的枠組みとは、人間のもつ認識のア・プリオリな条件と考えられこの前提に立って全ての哲学が構築されている。すなわち時間の存在はいわば自明であり、言い換えるならば時間の存在とは人間の個人的意志によらずとも存在している根本形式なのである。この根本形式はもはや疑われることはあるまい、とカントでさえ素朴に信じた。一方、近現代の物理学の洗礼を受け、相対性理論の存在を知りながらもその内容をあまりよく理解せず、日常暮らしているわれわれ一般人にとっては、クロノスという時間の存在は疑いようのない事実であろう。「時は最大の医者である」という古代ギリシアの言い伝えがあるが、これなども過去という時が流れ去り、やがて記憶の中からも消え去ることによって、苦しみや悲しみから

人間が解放されるさまを表しているのではないだろうか。

以上でクロノスという時間の意味の記述をここで終わる。しかし同時にこのクロノスの意味を正確に把握することなくして、決して次に述べるカイロスの正確な意味は知りえないことを断っておきたい。それほどまでにカイロスとクロノスは、密接に関係していると同時に好対照を見せているのである。

IV カイロスという時間

カイロスとは、「切断する」というギリシア語の動詞に由来するギリシア神話に登場する一種の擬人神である。チャンス、絶好の機会を支配する男性神で、最高神ゼウスの末子。オリンポスにカイロスの祭壇があった、前髪は長いが後頭部は禿げた美少年の姿で彫刻されており、両足には翼がついていたと言われている。アドラストスの戦車の馬もカイロスと呼ばれているが、その関連性は分からない。一般にカイロスというと、前者の意味で使われることがほとんどであるので、ここではチャンスという意味を帯びたカイロスという時間意識について述べてみたい。

その彫刻が指し示しているようにカイロスには前髪しかない、であるからもし前髪をつかみ損ねたからその直後に後ろ髪をつかみ直そうと思っても手遅れである。カイロスをつかむ一瞬のタイミングを外すと、二度とその機会は訪れない。前髪と後ろ髪の比喻、カイロスのイメージの彫刻とはカイロスのもつ一回限りの瞬間性を表し、両足についている翼とはカイロスのもつ浮気性、空中浮遊性を暗示していると考えられる。ここからカイロスとは予想不可能なものであり、神出鬼没な性質をもったものであることが容易に理解できよう。

太宰治が「チャンス」という極めて短い小論を残しており、その中で次のような一節がある、「チャンスといふ異國語はこの場合、日本に於いて俗に言はれる『ひよんな事』『ふとした事』『妙な縁』『きつかけ』『もののはずみ』などといふ意味に解してもよろしいかと思はれるが⁽³⁾、(以下略)」。ここで太宰がチャンスを英語の chance から考えていたことは当然であるが、

果たしてそのギリシア語の意味にまでさかのぼって考えていたかどうか、つまりチャンスのギリシア語がカイロスであることを太宰が知っていたかどうかは分からない。ただし一流の文学的センスと一流の直観力を持ち合わせていた太宰にとって、チャンスの意味を正確に把握することはそれほど難しいことではなかったはずである。ひよんな事であり、ふとした事であり、妙な縁であり、きっかけ、もののはずみ等々の解釈はどれも的を射たものであった。まさしく時が切断される瞬間を、的確に表現したものが太宰の解釈であることはここに明らかであろう。さらに注目に値するのは「チャンス」の冒頭の一説で、太宰がチャンスを偶然的なものとしてとらえるのではなく、例えば恋愛などのチャンスを人間の意志で自らつかむもの、と考えている点である。見かけ上は偶然現れてくるチャンスは、自らの意志でつかまないと簡単に逃げてしまう、と太宰は考えた。

カイロスにチャンスの意味が含まれていることは、以上の記述で明らかであろう。しかしカイロスのもつもう一つの重要な意味、すなわち正しい時（right time）について一言述べておきたい。この場合の正しい時とは、あるいはまた成就（fulfillment）の時と考えても差し支えない。古くはギリシア神話によく出てくるように、その折々に人間は神の声を聞くために占星術師や祭司、また預言者に頼っていた。デルポイの神殿において、我が子の運命をたずねたオイディプス王子の悲劇物語などはその最たるものである。あるいはまた種を植える時、刈り入れの時、結婚の時、戦争を始める時に至るまで、人々は人間の意志によらず神の声、天の声を聞こうと努めてきたのである。これを人間自らの主体的判断の放棄、主体性の喪失と見るか、有限的存在である人間の限界を悟った後の謙虚な判断と考えるかは微妙な問題であろう。ともかく人間は決断を下さねばならない時に際して、その正しい時を知ろうとした、そしてその方法とは、ことごとく宗教的性格を初めから帯びていた。永遠が時間の中に突入してくる瞬間とは、チャンスの意味であれ、正しい時、成就の時の意味であれ本質的に宗教的ニュアンスが伴っている。

以上の点を根拠づけるために波多野精一の古典的業績の一節を引用したい。波多野は『時と永遠』の冒頭で次のように述べている。

「永遠」は種々の意味において時乃至時間性を超越乃至克服する何ものかと考へられ得るゆゑ、「時と永遠」の問題は種々の形において種々の観点よりして取扱はれ得る。吾々は今これを宗教哲学の観点より取扱はうと思う。これはプロティノス以来の歴史的伝統の圧倒的圧力によつてすでに促される事でもあるが、又特に、「永遠」の觀念が、後の論述の示すであらう如く、宗教においてはじめてその本来の力と深みと豊富さを發揮し得ることによつて實質的にも要求される⁽⁴⁾。

波多野は時間哲学が本質的に宗教哲学の問題として論じなければならないことを明言している。しかしここで言う宗教哲学が、例えばティリッヒにみられるようなキリスト教神学とは、また別の次元のものであることには気づいていなければならない。客観的宗教哲学および宗教学と、自己自身の主観的信仰を前提としているかあるいは暗に内在している神学との混同は、まったくの学問的誤りであり学問的混乱を引き起こす不幸の元である。この混乱を避けるためにも、ここでは波多野が時間論の宗教哲学的解決法を模索していたという事実だけを指摘しておきたい。

カイロスの語源が、切断するというギリシア語に由来することは以前にも述べたが、「永遠なるものがこの世と触れ合う時、この世の時間が一瞬切断される」と詩的に表現できないであろうか。この切断面はまさにユークリッド幾何学的には、場所をもたない。あくまでも時間性に属するものである。空間概念を飛び越えた流れ行く時間系列の、そのわずか一瞬の中に存在するのであろうカイロス。何よりもわれわれ人間は、このカイロスによって自らの生き方の決断をしてしまう。それゆゑカイロスはチャンスであり、成就の時であり、正しい時なのである。もはや物理的時間が問題なのではなく、人間の意識との関連の中で主題化される時間こそがカイロスに与えられた問題であり、カイロスに課せられた課題となる。人間の生き方が問われる以上、主体的決断が問われる以上、カイロスという時間意識は実存哲学や神学思想に不可避的に近づいていくのである。あるいは正確には、クロノスだけでは説

明のできないあまりにも人間的な時間感覚を何とか説明し解釈するために、クロノスとは質的に異なる時間概念が要請された、と考えることもできよう。歴史時間の中へのカイロスの到来、カイロス出現の意味の考察、これこそが本稿のテーマである。

瞬間時、運命であるとともに決断としてわれわれに肉薄してくる瞬間⁽⁵⁾、満ちた時、時期、機会、好機、有用、適切、うまくいくこと、適度、急所、等々⁽⁶⁾。ギリシア語辞典を引くと、カイロスには以上のような訳語がつけられている。これらはどれもがカイロスのもつ一度限りの決定的瞬間を、何とか表現しようとした試みの結果である。天が下のすべてのことには季節があるように、カイロスは節目節目に彗星の如く現れる。人はその一生の中で必ず一度は、転機あるいは転換期を迎える。そしてその瞬間こそが本人にとって最も「切実な時」であり、「掛け替えのない時」ではないだろうか。掛け替えがないということ、つまりその代わりをするものがない一回限りの刹那的はかなさを持った時間こそが、カイロスという時間であり、カイロスを感じ取る時間意識の本質と言えよう。カイロスを自らつかみ取り、決して逃すまいという強固な意志が前提とされていることは言うまでもない。後ろ髪をもたないカイロスは、前髪をつかみ損ねたならば、もう二度とつかみ取ることにはできない。一期一会という、一生に一度しか会うことのできない不思議な縁を最も正確に表現しているギリシア語が、このカイロスであることはこれ以上説明する必要がないであろう。日本人にもギリシア人にもまったく共通する共通感覚が存在している、と考えられる。

時間を意味するクロノスとカイロスをより深く理解するために、ここで一言アイオーン (*αιών*) についても述べておきたい。アイオーンとは通常、永遠と訳されている。それは存続する時間であり、人間の一生、一時代、宇宙が一周する一周期などを表すことから、永遠の意味が伴ってきたのである。神を完全なアイオーンとみなしたグノーシス派の発想などは、この最たる例である。日本の神学界にも非常に強い影響を与えたクルマンの『キリストと時』の中で、極めて明瞭にカイロスとアイオーンを区別して定義している一節があるので引用してみたい。

新約聖書の時間の考え方を最も明らかにあらわす二つの概念は、通常カイロス（*καίρος*）とアイオーン（*αἰών*）で表現されている。時に関係したいろいろな表現に 対して、適当な訳語を見出すのは容易でない。個々の場合に依り、全体の関連から来る神学的意味内容によって、それは決定されねばならぬ。新約聖書においてこれらの用語がまた、特別の神学的な含みなしに用いられることがあるのは、諸辞典をみれば明らかである。

カイロスの特徴は、或る内容的に規定された時の一点が問題となることであり、他方アイオーンの場合には、継続した時、即ち有限もしくは無限の時の長さが示される。新約聖書においては、両者が、特にその場合々々に依りて、救済史によって充実されたところのその時間を示すために用いられている⁽⁷⁾。

この引用で明らかなように、アイオーンという時間はクロノスともカイロスとも質的な一定の継続する時間を示すときに用いられるものである。時、時間の定義とはまさに見て来た通り、永遠の哲学（*philosophia perennis*）と考えてよいであろう。すなわち一口に時間といっても、その時間がどのようなコンテキストで用いられているものであるかを、厳密なまでに定義してからでないと、少なくとも学問的評価はできない。次節において、ティリッヒがどのようなコンテキストで、またどのような厳密な意味でカイロスという語を使っていたかを検証したい。語の一般的意味を踏まえたうえで、ティリッヒ独自に見られるカイロス論を明らかにすることが本稿の目的の一つである。時間概念の研究とは、人類に永遠に課せられた永遠の課題である、と筆者は考える。

V ティリッヒのカイロス概念

カイロスという語を学術用語として定着させたことは、ティリッヒの大きな貢献の一つである。またカイロス論を哲学神学的議論のテーマの一つとし

て取り上げられるようになったことも、ティリッヒによる貢献といってよい。その結果、われわれは多くの恩恵をティリッヒから受けている。

そもそもティリッヒには、揺るぎのない歴史哲学意識があった。ティリッヒが構想する歴史哲学とは、しばしば特徴的三概念といわれるものによって特徴づけられている。その第一のものが今述べているカイロス概念であり、第二のものがセオノミー (theomomy), 第三のものがデモーニッシュなもの (das Dämonische) である。ここでは簡潔にセオノミーとデモーニッシュなものに触れておきたい。セオノミーとはテオスとノモスの合成語であり、各々の語の意味通り日本語では神律と訳されよう。時間と歴史の流れを神が支配しているという強い意識、これこそがセオノミーを表す最適なものである。ティリッヒは中世をローマ教皇一人が支配していた他律文化の時代と考え、ルネッサンス以降の世俗的ヒューマニズムの時代を自律文化の時代と考えている。そしてこのどちらにも組まない、正しい歴史支配のことをセオノミーという語によって表現したいのである。後期シェリングから直接的に学んだデモーニッシュなものへの気づきとは、ティリッヒによる独創性の一つである⁽⁸⁾。歴史を思わぬ時に思わぬ方向へと導いてしまう、悪魔的契機、魔的瞬間、ソクラテスに対して禁止的否定的声を発する「ダイモンのお告げ」を思わせる謎めいた声、以上これらがデモーニッシュなものの特徴である。「形式創造の能力と形式破壊の能力の統一」であるデモーニッシュなものによって、ティリッヒは歴史のダイナミズムを考察した。カイロス、セオノミー、デモーニッシュなもの三概念により、ティリッヒは「神律文化は、いかにして成就するか」ということを常に考えていた、非常に長いスパンで歴史をティリッヒがとらえていた事がここでもうかがえる。ティリッヒ思想とティリッヒの神学が他の神学者たちと著しく異なるのは、まさにこのティリッヒの歴史哲学にある。歴史哲学に対する深い関心こそが、ティリッヒの最大の学問的貢献であると筆者は考える。さらにこの歴史哲学は、ある場合には心理学と接近し、ある場合には神話学に接近するという副次的だが面白い展開を見せるのである。

VI 初期ドイツ時代のティリッヒの歴史哲学

ティリッヒは1886年にドイツのシュタールツェデルで生まれ、1933年にナチスの追われドイツからアメリカに亡命し、1965年アメリカにて没した。1951年から1963年にかけて出版されたティリッヒの主要著作である『組織神学』全三巻があまりにも有名となってしまったために、また「究極的関心」(the ultimate concern)という言葉が一人歩きしてしまったため、ティリッヒのドイツ時代に書かれた数々の著作と論文が見落とされがちである。この点はティリッヒ研究の大きな問題のひとつである。

さてティリッヒの初期といっても、厳密には初期の後期であるが、ティリッヒはかなり多数の、そしてその一つ一つは比較的短いが、ティリッヒ思想を解説する上では非常に重要な歴史哲学に関する論文を残している。「カイロス その一」、「カイロス その二」、「デモーニッシュなもの」、「歴史と終末論」、「キリスト論と歴史解釈」、「預言者の歴史解釈とマルクス主義的歴史解釈」、「歴史的歴史解釈と非歴史的歴史解釈」、「敗北における勝利」、「カイロス その三」、「カイロスとユートピア」、「諸民族の生活におけるユートピアの政治的意義」⁽⁹⁾などが残されている。一番初期のものは1922年であるが、それ以外のものもその基本構想は初期に形成されていたと考えられる。ティリッヒはドイツ語で思考していたため、アメリカ亡命以降も初期のそして母語のドイツ語による歴史的思考は、そのまま残っていた。特に、「デモーニッシュなもの」というドイツ語独特の意味と響きをもつ言葉を、それ自体をテーマにして論文を書いたのも1926年である。そしてこの論文には、「歴史の意味解釈への貢献」という副題がつけられていることが重要である。ティリッヒは初期ドイツ時代においてもうすでに、カイロス、デモーニッシュなものなどの特徴的概念を、歴史哲学を読み解く鍵と考えていた。次の一節がティリッヒの基本的学問的姿勢を表すものである。

本書の中で著者はいろいろな考え方をもち出すが、著者が意図しているのは、歴史を意識した思惟を喚び起こすことである。すなわち、その根が

無制約者の深みに達し、その概念が人間精神の根源関係から汲み取られ、そのエトスが現在の時点に対する無制約の責任であるような一つの歴史意識を喚び起こすということである。しかし、この喚び起こす仕方は、説教とか演説とかいう形をとらず、ロマン主義とかポエジーとかにもならず、きまじめな概念による作業、一種の歴史哲学を打ちたてようとする苦闘という形をとる⁽¹⁰⁾。

ティリッヒは繰り返し「歴史を意識した思惟」という表現を用いている。この歴史を意識思惟こそ、その典型がカイロス概念であり、歴史を思わぬ方向に動かしてしまうデモーニッシュなものの意味である。そこでティリッヒは繰り返しカイロスとクロノスの違いを明らかにしつつ、本丸である歴史哲学へ向かう。そして歴史的瞬間を時間のアトムでとらえるのではなく、永遠のアトムでとらえるということ、この場合の永遠のアトムとは時間が切断されていることの最大の表現なのである。カイロスを用いるようなティリッヒ独特の弁証法的な上からの弁証法神学を、ティリッヒがキルケゴールから学んだことはまちがいない。またデモーニッシュなものというやや神秘主義がかった発想を、ティリッヒが後期シェリングの神秘思想から導入していたことも確かであろう。このように考えるならば、初期ドイツ時代にティリッヒが学んだ哲学神学が、後のティリッヒに決定的影響を与えた、と言える。神が支配する正しい時を神律と表現し、歴史とはこの神律実現のための世俗的時間となる。このクロノスの時間の中で、たまたま命を与えられたわれわれ人間の果たすべき使命とは何か、言い換えればクロノスの中でいかにしてカイロスを感じ取るか、がティリッヒ神学の最骨頂である。

歴史そのものをティリッヒが救済史と考えていたことは、以上の分析を見れば明らかであろう。研究の究極的目的が、歴史の成就を研究することにあるからである。また客観的に研究すると同時に、自らの果たすべき現在の歴史的责任についてもティリッヒは真剣に考えていた。ここにティリッヒの決して無責任でない自己の信仰的に忠実な面を見ることができるのであるが、しかしティリッヒも人の子、時にはやや焦りすぎたためか、歴史判断を急い

だきらいもあった。戦争に明け暮れる二十世紀を生きた一人の神学者の軌跡について、次節で述べてみたい。

VII 「カイロス・サークル」への参加

二十世紀初頭から、厳密には第一次大戦が終了した1918年以降、ヨーロッパを中心にして社会主義を信奉しながらヒューマニズムに基づき、さらにキリスト教的な友愛と博愛の精神をもつ思想が流行した。現在から見るならばこれは明らかな理想主義であり、またそれぞれの思想のいいとこ取りの混合主義的で、とても現実味がないもののように思われる。しかし当時の人々がまだまだ現実の政治に失望をしていなかったことの証左として、一考に価するものである。キリスト教社会主義とも、宗教社会主義とも呼ばれ、日本においても大正デモクラシーの時代に一種流行した。そこには個性尊重、生活重視、民主主義、弱者救済、差別撤廃、強制反対、宗教自由、自由平等、国際協調など、あらゆる理想的な言葉が並べられていた。極左的マルクス主義ではないが、マルクスの目指した基本理念である平等社会の実現を本気で考えていた。

このような世界的気分の中で、ティリッヒも例外ではなかった。ティリッヒは1919年から1933年まで続いた、いわゆるドイツのワイマール共和国のただ中に生きていたのであるが、この時ティリッヒはキリスト教と社会主義から生まれ、独占的資本主義と独裁的国家主義を排除した新しい社会秩序を目指したのである。ティリッヒ以前にもう宗教社会主義という言葉は定着して使われており、この言葉と運動の創始者はクリストフ・ブルームハルト、ヘルマン・クッター、レオンハルト・ラガツらであった。彼らは特にドイツとスイスの社会党を、キリスト教の名において支持すべきであると考えていた。ティリッヒは、1920年にベルリンでギュンター・デーエンとカール・メニッケの指導によって設立された宗教社会主義のグループに自ら参加している。これはベルリン・サークルとも、やがてはカイロス・サークルと呼ばれたものである。この他にも参加した主だった人々とは、アードルフ・レーヴェ、エドゥアルト・ハイマン、アレクサンダー・リュストウ、アルノル

ト・ヴォルファースらである⁽¹¹⁾。このカイロス・サークルはベルリンの政治学研究所の講壇で主張を述べたり、また『宗教社会主義誌』(*Blätter für den Religiösen Sozialismus*) という小雑誌を1926年まで発行した。

しかし以上のティリッヒの野心的理想的試みは、失敗したと言わざるを得ない。不幸なことに1933年にティリッヒはドイツを追われアメリカに亡命する、ナチス政権樹立とともに、文字通り追われたのである。ティリッヒらの抵抗空しく、ドイツ国民はヒトラーに洗脳された。カイロスは言うに及ばず、小さなカイロスの意味で使われるカイロイ(カイロスの複数形)さえも到達せず、ドイツ是最悪の事態を迎えてしまった。また亡命先のアメリカには、建国以来の伝統から社会主義的平等を嫌う風土が満ち満ちていた。因習を嫌う代わりに、自由なる競争社会を目指すことがアメリカの国是であった。そしてこの基本理念は今日のアメリカにも息づいている。ここに宗教社会主義を奉じ、ヨーロッパ的理想主義を振りかざす状況などまったくなかったと考えざるを得ない。それでもティリッヒは自分をアメリカに呼んでくれたラインホルド・ニーバーとともに、社会的発言は試みたものの、そのトーンダウンは否めない。カイロスは到来しなかった、宗教社会主義は実現できなかった、これがティリッヒの得た残念な結論だったのである。

おそらくユダヤ・キリスト教の伝統である歴史の流れを長く長く見る見方を、ティリッヒは痛感したことであろう。少なくとも自分の生きる時代には、カイロスは残念ながら実現できなかったのである、にもかかわらず希望をもち続けること、この経験から現実の歴史時間をはるかに超えたところにティリッヒの眼は向かったはずである。カイロス・サークルの夢失敗を通して、ティリッヒはここに益々預言者の歴史観、すなわち本来のユダヤ・キリスト教の歴史観に立ち返って行ったのではないだろうか。カイロス・サークルは今もその理念は綿々と生き続きながらも、活動報告の記録は何もない、歴史的所産としての評価にさらされるのみである。

VIII 存在論的神学における時間論

その本質的構造が存在論(ontology)にあるティリッヒ神学は、いかにし

て時間論を展開できるのであろうか。そもそも存在と時間とは、すべての存在の本質的両極である。少なくとも近代物理学の決定的影響下にある現代においては、存在と時間、空間と時間という二つのカテゴリーを前提としなくては、何事も進まない。言うまでもなく存在と空間とは静的で固定的な概念であり、つまり止まっているものである。一方の時間とは、特定の場をもたない動的なものである。その初めから存在論と時間論を融合させることは不可能であり、別々に論じた上で二つの関わりをきちんと説明できればよいと筆者は考える。さもないと存在論的神学や哲学には、時間論がない、人格神と人格性が出てこない、主意主義的決断意識がないなど、半永久的に非建設的な批判にさらされてしまうことになる。これは相手に全てを求め、少しでも欠けている要素を逐一批判するという極めて卑怯な批判ではないだろうか。全てを網羅し、かつ体系的で完璧な学問、果たしてそのようなものがこの世には存在し得るのであろうか。懐疑的にならざるを得ない。

本稿は明らかにティリッヒ擁護の立場から論が進められている。しかしティリッヒ自身がその神学が存在論的であるがゆえに、時折存在論と時間論との矛盾とは言わないがある種の緊張関係に気づき、苦悩していた様子はいかがえる。次に例示するティリッヒの一文が、以上の点を如実に表している。

時間と空間とを相互依存的に取り扱うことは便宜であり、また或る意味において、(カントが示したように)、不可避である。ある存在の領域において、時間または空間が優勢である程度に従って、一種の比例的な関係がある。一般的に言って、われわれは次のように言うことができる。或る領域が無機的次元の優勢の下にあればあるほど、それはより一層空間の優勢の下にある。それとは反対に、或る領域が歴史的次元の優勢の下にあればあるほど、それはより一層時間の優勢の下にある。生と歴史の理解において、この事実は「時間と空間の紛争」(struggle between time and space)をもたらした⁽¹²⁾。

ティリッヒはここで言われている時間と空間の紛争を、特に宗教史の中で顕著に見られることを強調している。しかし重要なことは、ティリッヒが時間と空間という二つの先験的枠組みをやはり無条件に前提としていたことである。けれども人間の生および現実の歴史を厳密に論じる際には、不可避免的に時間と空間の紛争が起きることも前提としていたようである。従ってこの紛争という緊張状態を描写する時には、必要以上に記述が長くなっていることも肯げよう。静的存在論の中のどの場所に動的歴史を位置付けるか、いかにして空間の中に時間の居場所を設けるか、ということがティリッヒの永遠のテーマであったと考えられる。

この意味でカイロス概念の導入こそが、以上の根本問題に答えるための準備であり結果であると言える。ティリッヒの苦悩を根本から救ったものが、カイロスという時間概念に他ならない。

IX 残された問題と今後の課題

二つの時間意識、すなわちティリッヒ神学におけるカイロスとクロノスの意味を探ることが本稿の目的であった。しかしここに残された問題は、膨大でありかつ根源的である。なぜならば存在論というカテゴリーの中でいかにして時間論を展開するか、という素朴な疑問が最後まで払拭できないからである。存在論と時間論、存在論と歴史哲学、存在論と実存主義、これらの相反する思考様式をいかにして一つにまとめて体系的のものとするか、ということが今後の課題であり永遠の課題であろう。

先述した通り、ティリッヒ自身もこの点には十分気づいていた。そして注意深くティリッヒの主著である『組織神学』を読むならば、誰でも比較的簡単にこの根本問題に突き当たるであろう。初期のドイツ語で書かれた歴史哲学についての論文は、極めてダイナミックな時間意識に基づく時間論が展開されているが、アメリカに渡ってから英語で書かれたものは、存在論の枠組みがきちんと整っているその分だけ時間意識が薄れてしまっていることは否定できない。ここにティリッヒ思想の限界があると同時に、ティリッヒ思想の面白味もあると筆者は考える。静と動の出会いのダイナミックな展開のプ

ロセス、この点がティリッヒ思想の真髄と言えるからである。

X おわりに

本稿を閉じるにあたり、突き詰めると時間論の研究はユダヤ・キリスト教の時間研究にまで遡らなければならないことを指摘しておきたい。特に旧約聖書に残されたユダヤ教思想に見られる強烈なメシア待望意識、天地創造から終末に至る直線の時間意識、その預言者的意識から来る将来志向、これらの根本問題を常に意識しながら神学研究に励むことが何よりも肝要なことであることを、ティリッヒはわれわれに教えたのであると思う。終わりに書くことが初めに書くことと見事に重なっている、ティリッヒが根本問題に触れていた思想家であり神学者であった所以である。ティリッヒがそうであったように、初めに戻って本稿を終えたい。

注

- (1) 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, 1998年, pp.216-217。
- (2) 佐藤敏夫『時間に追われる人間』, 新教出版社, 1990年, p.36。
- (3) 太宰治「チャンス」, 『太宰治全集 8』収録, 筑摩書房, 1986年, p.258。
- (4) 波多野精一『時と永遠』, 岩波書店, 1977年, p.1 (旧漢字は一部, 現代表記に改めた)。
- (5) 『哲学事典』, 平凡社, 1971年, p.220。
- (6) 『ギリシャ語辞典』, 大学書林, 1989年, pp.563-564。
- (7) O. クルマン『キリストと時』前田護郎訳, 岩波書店, 1954年, pp.22-23 (旧漢字は一部, 現代表記に改めた)。
- (8) ヴィルヘルム&マリオン・パウク共著『パウル・ティリッヒ 1 生涯』(以下『生涯』)田丸徳善訳, ヨルダン社, 1979年, p.137。
- (9) ティリッヒ『キリストと歴史』野村順子訳, 新教出版社, 1971年, pp.2-3。
- (10) 前掲書, p.7。

(11) 『生涯』, p. 95。

(12) ティリッヒ『組織神学』第三卷 佐藤敏夫訳, 新教出版社, 1984年,
pp. 398 - 399。

引証資料

池田晶子『14歳からの哲学』, トランスビュー, 2005年。

池田晶子『14歳の君へ』, 毎日新聞社, 2007年。

池田晶子『新・考えるヒント』, 講談社, 2004年。

入不二基義『時間は実在するか』, 講談社現代新書, 2002年。

大島末男『ティリッヒ』, 清水書院, 1997年。

佐藤敏夫『近代の神学』, 新教出版社, 1964。

中沢新一『人類最古の哲学』, 講談社, 2002年。

中沢新一『対称性人類学』, 講談社, 2004年。

中島義道『「時間」を哲学する』, 講談社現代新書, 1996年。

橋元淳一郎『時間はどこで生まれるか』, 集英社新書, 2007年。

真木悠介『時間の比較社会学』, 岩波書店, 1982年。

Concerning the Concept of Time

—Kairos and Chronos—

Taro Iwamura

This paper aims to analyze two concepts of time, namely kairos and chronos. There is a great difference in meaning between kairos and chronos. Chronos is generally translated as usual time and physical time, on the other hand, kairos is interpreted as right time, good timing, season, opportunity and chance etc. The meaning of chronos is very objective, however, the concept of kairos is subjective, meaning that we can recognize the timing of kairos only from ourselves.

Paul Tillich, the contemporary philosopher and theologian, emphasizes the feeling of kairos. Tillich who studied S.Kierkegaard, acquired numerous concepts from him, such as existentialism, the demonic, the moment, and the concept of kairos.

The structure of Tillich's theology is said to be ontological, that is, his thoughts are mainly based on Greek ontology, which is both traditional and old fashioned. Ontology is static, while time is dynamic. This is the fundamental contradiction, when Tillich associates kairos with his ontology. Particularly when he discusses the philosophy of history, he applies the concept of kairos frequently. Though recognizing the difficulties in relating his ontology with the philosophy of history, Tillich attempts to develop better consistency between those two schools of thought.